

二つのロサンゼルス

近藤 すす代
マイケル オノフレイ

二つのロサンゼルス

目次

はじめに

7

サンバレーの日々

義母グレイスとの同居

16

私はケチ？

19

アクセントの問題

23

イタリア料理を作り始めるまで

26

ハロウィーンの思い出

30

初めての感謝祭のディナー

35

コミュニティ・カレッジとマリアのこと

39

裏庭物語 一 グレイスの裏庭

44

裏庭物語 二 魅惑のハミングバード

47

裏庭物語 三 愛しのリスたち

51

裏庭物語 四 拝啓、ジエイご夫妻様

裏庭物語 五 ネコのむっちゃん

裏庭物語 六 僕たちの裏庭

55

59

65

小説 ジミー・ジョーンズ

69

はじめに

アマゾンPOD

私の初めての本である「二つのロサンジェルス」がアマゾンで販売されることになりました。表紙の水彩画を夫に頼み、その他の出版までの作業は自分で行いました。今、なんとも言い難い喜びや満足感があります。

セルフ出版のきっかけとなったのは、趣味で小説を書いているアメリカ人の夫がアマゾン・キンドルのサービスを知ったことでした。表紙のための水彩画を描き終えファイルの準備が整うと、夫はキンドル・ダイレクト・パブリッシング（KDP）にアカウントを開設し、ワードと画像ファイルをサーバーにアップロード、続いてその場でエラーの修正と再アップを行い、「出版」をクリックしました。確か二日か三日して夫の書籍がアマゾンのサイトに掲載されたので、夫はアマゾン・ジャパンを通して注文したところ、二日か三日後に自著が届きました。

アマゾンPOD（プリントオンデマンド）は注文を受けてからの印刷なので在庫はなく、販売までのサービスは無料です。夫はキンドル・アメリカを活用し

ましたが、出版・購入はどの国からも可能で、アマゾンの著者紹介のページ「オーサーズ・セントラル」の開設も無料でできます。最低価格より上に書籍の価格を設定すればロイヤルティも入ります。夫はペーパーバックと同じKDPファイルを利用してデジタル版も作りましたが、こちらは簡単にできました。

そのプロセスを隣で見ながらアマゾンの画期的な発想とサービスに心打たれた私は、二つのことを考えました。一つは自分の本を出版することです。当時Kindルには（この十月中旬まで）日本語での紙書籍出版サービスがありませんでした。しかし、アマゾンPODに完全準拠の「ネクパブ・オーサーズプレス」（株式会社インプレスR&D）を知ったことで、それが実現いたしました。

もう一つは、セルフ出版のサポートがしたいということです。自費出版とは違いアマゾンのサービスは無料ですが、すべてを自分で行わなければなりません。本作りには、原稿をDTP編集し、表紙画像を作り、それをアップロード・訂正するなど様々な作業が含まれます。私の本作りに表紙絵が必要だったように、夫が表紙画像ファイル作りに私を必要としたように、サポートがあれば、という作業が出てくるかもしれません。自分の本が手元にある喜びを知った私は、出版を願う方の

のお手伝いができれば、と思いました。

原稿を作る

本の出版を決めたとき原稿がなかった私は、過去のブログから今は亡き義母、グレイスとの同居生活の記事を抜粋することにしました。タイトルを「サンバレーの日々」とし、背表紙にそれを入れるつもりでした。しかしそのためにはページ数を増やす必要があり、私は、夫であるマイケル オノフレイがこの同居の時期に書いた短編小説「ジミー・ジョーンズ」を翻訳することにしました。ノンフィクションとフィクションでジャンルは異なるけれど、ロサンゼルスが背景という共通項があるから、と理由をつけ、本のタイトルを「二つのロサンゼルス」と決めました。

原稿作りはこうして始まりました。いくつかがことが重なって完成までに半年以上かかったのですが、私はその過程で、今まで知らなかった「書き、読む」という行為の不思議な作用を経験することになりました。

「サンバレーの日々」では、記事に書かれた過去の出来事をより正確に描写しようと、私は記憶の再現を始めました。文の手直し作業だけだから簡単だと考えて

いたのですが、何度も書き直しを繰り返すうちに、頭の中にあつた記憶が思い出して心の中に入っていくました。私は過去の出来事を、まるで舞台を見ているように眺めていました。その風景が現実起こったことの再現なのか、登場人物の一人である私の目を通して語られた風景なのか、輪郭が曖昧になりました。

「ジミー・ジョーンズ」の翻訳は、英文解釈と両言語の能力不足以上に大変な作業でした。原文にはサンバレーの日々を思い起こさせる描写があつたので、私はこれ幸いと、私の周りに実在した人物をモデルとして頭に置き、彼らのイメージと重ね合わせながら訳し始めました。しかしそれを知った原作者の夫は「ジミー・ジョーンズ」はフィクションであり、これは大事なことだと次のように言いました。

私にとって短編小説とは生活のある側面を垣間見せるものであり、例えば物語の舞台がロサンゼルスであるのなら、その物語はある年代のそこでの生活を、一つの視点で見つめ直します。短編小説はフィクションなので作者に完全なる創作の自由が与えられており、同時にこれはチャレンジであるとも言えます。しかし物語は、ノンフィクションが決してたどり着くことができないう真実を伝えることができ、そ

してこの課題があつてこそ物語は展開します。実在しない人物たちが、あたかも本当の人々のように生きる様子は不思議です。とはいえ、彼らは本当の人々ではありません。彼らは架空の存在です。

私にとって物語を書くという未知の行為を英語で説明されて、わかつたとは思いませんでしたが、サンバレーを思い起こさせる描写はそれとして置き、私はモデルという「私」の見方を改めることにしました。そして原文を読み日本語に訳し、その日本語の意味が通らなければ原文に戻り、読み直して日本を訂正する、という作業を繰り返しました。これほど丁寧に小説を読んだことがあつたらうか、と自分を褒め、二度と小説の翻訳はしないと決意したほどの忍耐力でした。そしてついにこの切りのない作業にピリオドを打ったとき——私の中に一つの世界ができていました。そこに住むキャラクターをまるで私の親しい友人や家族のように感じるようになった「ジミー・ジョーンズ」の世界です。

翻訳を終え、「サンバレーの日々」を読み返すと、とサンバレーの思い出がより色鮮やかに感じられました。そしてそれはまるで物語のようでした。「二つの口サンジ

エルス」はジャンルが異なる「サンバレーの日々」と「ジミー・ジョーンズ」で構成されています。しかしそれらは私にとっては二つのロサンジェルスの物語であり、そのような形で本が完成したことを私は嬉しく思いました。

最後に。先日偶然にも「世界は舞台、人は皆役者」という言葉に出会いました。出版を思い立ったときは自分の本を手にする喜びしか想像できませんでした。その言葉で、私の内なるグレイスの裏庭で、生き生きと動きまわる愛らしい動物たちの姿が目に見えかきました。思わず笑みをこぼした私は、この本の原稿を書いたことと思ってもかけず多くの贈り物を手にしたことを知りました。

謝辞

何事にも協力的そして寛容な夫に。この本の出版で戸惑う私に、助言と励ましと表紙絵を与えてくれたことに心からの感謝を。

二〇二一年 初冬に

サンバレーの日々

近藤
すず代

義母グレイスとの同居

ロサンジエルス出身の夫と私は京都で出会い、一九八六年に結婚しました。そして毎年冬休みになると、私たちは南カリフォルニアで一人住まいの義母を訪れ、三週間ほどを一緒に過ごしました。

グレイスは穏やかでよく気の付く優しい人でした。動物も大好きでした。訪問し始めたころ義母はフルタイムで働いていましたが、疲れて帰ってきててもまず愛犬シエツプの夕ご飯、レバー入りのお粥を作りました。それからキッチンの隣のサービスポーチから裏庭に出て、遊びに来る小動物たちのために、ひまわりの種や無塩の殻付きピーナツを塀の上やテーブルに用意しました。そしてようやくお気に入りのパティオの椅子に座り、コーヒーと煙草でのんびりと一休みするのです。

そんな義母は大のお料理上手でもありませんでした。夫から話を聞いていた私は、当然夫ですが、毎回グレイスのお料理をととても楽しみにしていました。彼女はアメ

リカ生まれでしたが両親は「オーストリア・ハンガリー」からの移民で、小さいころ家族とはハンガリー語で話していたそうです。子供に聞かせたくない話の場合ドイツ語だったようですが。それはさておき、彼女は子どものころから親しんでいたハンガリー料理をよく作ってくれました。そして、ハンガリー料理といえばパプリカ！と、いつもその赤いパウダーを使っています。義母のお料理で私のお気に入りの一つは、ゆで卵をジャガイモと同じくらい使った、マヨネーズもたっぷり入ったサラダです。お飾り用にスライスしたゆで卵を出来上がったサラダの上に並べると、彼女は仕上げにきつとパプリカを一振りします。その時のグレイスの顔は本当に誇らしげでした。これでこそ正統ハンガリーポテトサラダだと言わんばかりに。

でもある年のこと。到着した私たちを待っていたのはいつものような手料理ではなく、野菜スープに卵を落とすだけの簡単な夕食でした。そして翌年、義母から仕事をやめたとの手紙が来ました。しかし体力が落ち始めたとはいえ、その後も義母は例年通り私たちをもてなしてくれました。クリスマス・ショッピングに私を連れて行き、夜遅くに伝統の胡桃菓子を作り、クリスマス当日には切り込みにクロープを挿してマスタードと黒糖を塗った、ニキロ以上の大きなハムを焼いたりして。

そして一九九四年の秋。お掃除やお買い物を手伝ってくれていたパティオ側の隣人から、愛犬シエツプが老衰で亡くなり、グレイスが寂しそうなので別の犬を紹介したのだけれど、結局どの子も気に入らないと電話が入りました。続けて彼女は、どうも運転中に道がわからなくなったらしく、この間彼女が夜になっても帰ってこないことがあった、と心配げに夫に告げました。

夫は一人息子です。その年の冬に定例訪問したときにグレイスと話し合って、夫は同居を決めました。当時私たちは兵庫県西宮市に住んでいて、一月十五日の夜にロサンゼルスから帰国したのですが、翌々日、十七日早朝に阪神淡路大震災に見舞われました。そんな中で何とか私の移民ビザ取得と移住の準備を済ませ、家財道具は父に預けて、夫と私は被災地西宮からロサンゼルスに向かいました。六月の初旬で、野茂英雄氏がロサンゼルス・ドジャーズに投手として入団し、トルネード投法と奪三振で大旋風を巻き起こした年でした。

私はケチ？

ロサンジェルスサンバレーに住む、当時七十八歳だったグレイスとの同居生活は、夫にとつては大ショックとともに始まりました。車無しでは生活できないロサンジェルスで、幸い義母の車があると喜んでいたのですが、その保険が切れていたことが発覚したのです。これを皮切りに、夫には早急に対処すべきことが次から次へとでてきました。一方私とは言え……文書類の整理や新生活の準備に追われ、毎日奔走している夫を後目に、彼の妻ではなくまるで彼の子どものように、すべてを夫に任せた生活をしていました。

グレイスと暮らし始めてしばらくしたある日の朝のこと。私は朝食にベーコンを焼くよう彼女に頼まれました。夫は食べないので私は大きなパッケージから二人分、多分六、七切れほどを取り出して焼き始めました。するとそれを見て義母が言い